

29. 黄金の驢馬（第二回：グピードーとプシューケーの物語）

著者：Apuleius（123頃－？）

原題：METAMORPHOSES（ASINUS AUREUS） 原著発行：西暦2世紀

訳者：呉茂一・国原吉之助 発行所：岩波文庫

訳書発行：2013年7月17日、1080円＋税

（1）前書き

私（筆者の林久治）は「黄金の驢馬」（以後、本書と呼ぶ）の紹介を始めている。その理由は、前回に記載したので今回は省略する。興味のある方は、前回の記事をご覧ください。

今回は、黄金の驢馬（第一回：物語の発端）を記載した。本書は11巻よりなり、有名な「グピードーとプシューケーの物語」（以後、本物語と記載する）は巻の4の最後の部分から、巻の6の最初の部分までに記載されている。今回は、巻の4の最初から、「本物語」の開始直前までの部分を紹介した。

今回は、前回に紹介した部分を以下に記載する。

巻の一：ルキウス（本書の主人公）コリントスからテッサリアに魔法の勉強に行く。旅人アリストメーネスと魔女メロエーの奇譚。テッサリアに着き、金貸しミロオの邸に泊まること。

巻の二：女中フォーティスと馴染みをかさねること。小母ビュラエナの邸での奇怪な物語。

巻の三：皮袋の化けた賊どもを殺した顛末。ミロオの妻、幻術で鼻に化すること。それをまねて、ルキウス驢馬になること。

巻の四：驢馬のルキウス、押入り強盗に曳かれて山寨にゆくこと。熊に装った盗賊の小頭トラシュレオーンの最期。（今回は、ここから紹介する。）さらわれた少女に老婆が「グピードーとプシューケーの話」を物語ること。

（2）今回（グピードーとプシューケーの物語）に登場する主な神々と人物

プシューケー：ギリシア神話に登場する人間の娘の名で、この言葉は古代ギリシア語で「心・魂」を意味する。日本語では、長母音を省略して「プシュケ」、または俗ラテン語読みで「プシケー」とも言う。児童向けの本では英語読みで「サイキ」と表記される事もある。本物語では、ある国の3人の王女の末っ子で絶世の美人。

クピードー：ローマ神話の愛の神。日本語では長母音を省略して「クピド」とも表記される。アモールとも呼ばれる。日本では、英語読みのキューピッドで知られる。ギリシア神話のエロースと同一視される。

ウェヌス：ローマ神話の愛と美の女神で、クピードーの母。日本語では英語読み「ヴィーナス」と呼ばれる事が多い。ギリシア神話におけるアプロディーテーと同一視される。アプロディーテーは、クロノスによって切り落とされたウーラノスの男性器にまとわりついた泡（アプロス）から生まれ、生まれて間もない彼女に魅せられた西風が彼女を運び、キュテラ島に運んだ後、キュプロス島に行き着いたとい

う。彼女が島に上陸すると美と愛が生まれ、それを見つけた季節の女神ホーラたちが彼女を飾って服を着せ、オリュンポス山に連れて行った。オリュンポスの神々は出自の分からない彼女に対し、美しさを称賛して仲間に加え、ゼウスが養女にした。

ゼピュロス：西風の神である。英語ではゼファー (Zephyr)。アネモイ (風の4神)の中で最も温和なゼピュロスは、春の訪れを告げる豊穰の風として知られている。ゼピュロスはトラキアの洞窟に住んでいると考えられていた。

二人の姉：プシューケーの姉たちで、妹に嫉妬して奸計を企む。

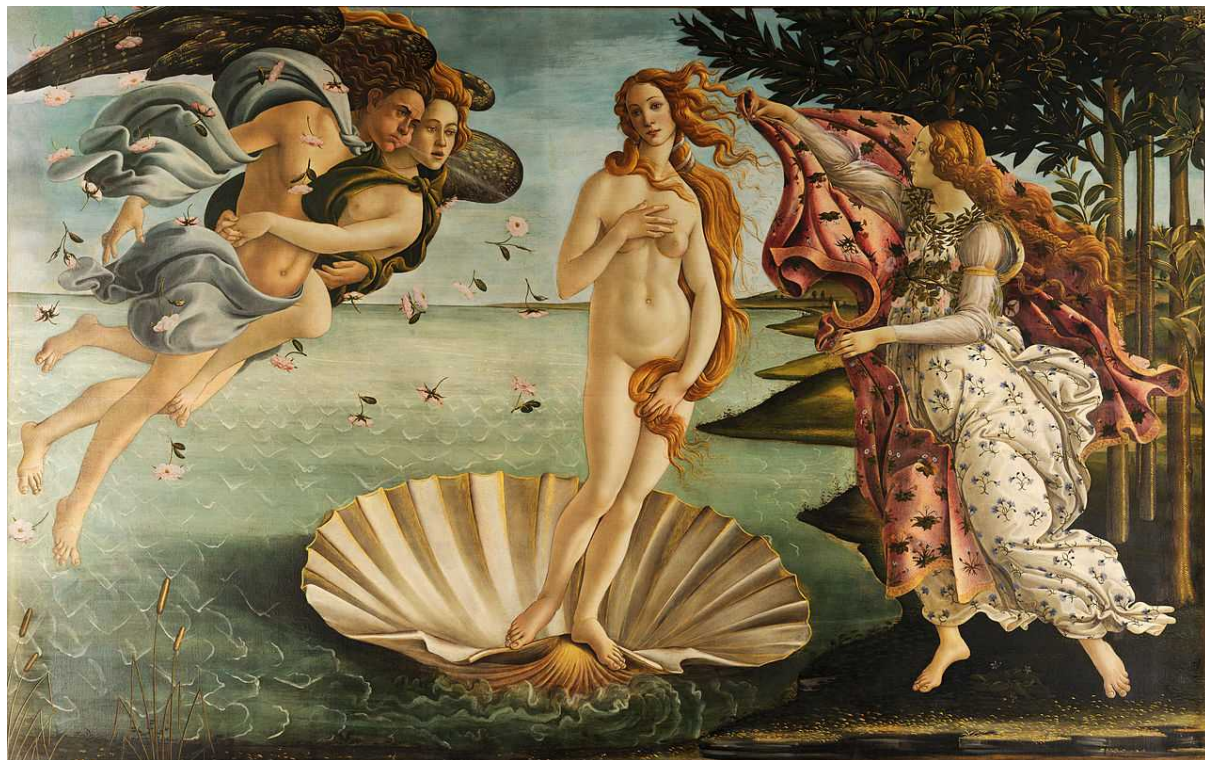


図1. [ボッティチェリ](#)の有名な「ヴィーナスの誕生」(製作：1483年頃)。

(3) 今回(第二回：グピードーとプシューケーの物語)の紹介と感想

(なお、以下において、訳者の注釈は括弧内に黒文字で記載する。また、筆者・林の意見や注釈を青文字で記載する。)

巻の四：驢馬のルキウス、押入り強盗に曳かれて山寨にゆくこと。熊に装った盗賊の小頭トラシュレオーンの最期。(今回は、ここから紹介する。)さらわれた少女に老婆が「クピードーとプシューケーの話」を物語ること。

p. 165-166：ある美しい王女が世界の人々から尊崇を集めた。

むかし或る国に3人の王女がおられた。3人はいずれも美しく、中でも末の姫様の美しさは格別で、国内外の人々は尋常ならぬ姫の御容色の噂を伝えて、まるでウェヌス様御自身でもあるかのように、うやうやしく崇め慕うのであった。国々には「紺青の海の泡沫からお育ちになった女神様(ウェヌス神のこと)が、諸方へお慈しみをお垂れになるお心で、衆生の間に立ち交わっておいでになる」とかの噂が拡まった。(古代社会では、イエス様と同様に、神様が人として顕現されることは珍しくなかったようだ。)

世界中の国々にこの噂が拡がり、沢山の人が長い旅路をかさね遠い海を渡って、皆その姫様へ願いをかけるようになった。今では誰一人として、パポスやクニドスやキュテラア島（いずれもウェヌス神に縁の深い聖地）へさえ本当のウェヌス様を拝みに舟を寄せる者はなくなり、供物はとだえ社は毀れてしまう有様であった。

p. 167-168 : ウェヌスは猛り立ち、息子のクピードーに復讐を命じた。

このように、天上の尊栄を濫りに移して、死ぬはずの人間の乙女を拝むことに変えてしまった始終を、本当のウェヌスは激しく怒って言った。「全世界の慈しみの母のウェヌスとしたことが、人間の娘などと一緒にされて尊い位を領けあうなんて。そうになったら、あの羊飼いの少年が私のたぐい麗容を、他の偉い女神たちよりずっと上に置いてくれたのも（トロイアの王子パリスが三女神の美を判定したこと）なんにもなりやしない。いつまでも好い気になって私の榮譽を横取りはさせないから。見るがいいさ、今に自分の道に外れた容色を後悔するようにしてやるから。」

ウェヌスは自分の息子（クピードー）を呼び寄せて、例の都に連れて行って、例の娘（姫の名前がプシューケーであることが、ここで初めて分かる）を指し示し、前の容色争いの一部始終をすっかりと聞かせたうえ、腹立ちのあまり嘆息をついたり猛り立ったりして言うことには、「お母さんの仇を取っておくれ、十分にだよ。容色を鼻にかけているのを、うんとどやしつけておくれな。あの小娘が世界で一番卑しい人間と、この上もなく烈しい恋に落ちるようにね。」

p. 169-171 : アポローンの御託宣。

一方、プシューケーは人並み勝れた容姿を持ちながら、何一つ自分の美しさの徳を享受していなかった。万人から賞め讃えられはしても、誰一人として姫の婿にと望んで来る者はなかった。二人の姉はほどほどの容姿で、近国の王様と縁組して幸福な結婚を楽しんでいた。それに引き換え、プシューケーはまだ夫もなく、ひとり家にこもっては捨小舟の侘しさをかこち、自分の容色をひそかに呪っていた。

こんな次第で、不幸せな姫の父王も大変お困りになり、イオニアのミーレートスにおいで神様に「この求め手もない少女に縁組と良人をお授け下さい」とお願いした。すると、アポローン（ユーピテル大神の息子で、太陽神）はこう御託宣された。「高い山の嶺に、王よ、その少女を置け。死に行く嫁入りの、粧いに飾らせて。また婿としては人間の胤から出た者をでなく、荒々しく凶暴に、蝮みたいな悪い男を待ち設けるがいい。翼をもって虚空を高く飛行して歩き、万物を悩まし、焰と剣をもってすべてのものを痛み弱らせる男、その者をユーピテル大神さえも懼れ、神々も彼には恐れをなし、諸川も、三途の河の暗闇さえも、怖気をふるう男なのだ。」

p. 171-174 : プシューケーの可哀そうな結婚式。

前には仕合わせだった王様も、この尊いお告げをいただくと、足も重く暗い心で御殿に立ち帰った。しかし神様の御命には従うよりはないので、可哀そうにプシューケーは町じゅうの人を後ろに引き随えて、生きながらの葬式が繰り出された。悲嘆にくれた両親に、娘の方が両親を励ました。「これが私の人並み勝れた容色の立派なご褒美です。私たちは道に外れた烈しい妬みのために、死ぬほど痛手を負わされています。自分が新しいウェヌスなどと呼ばれたばかりに、この身を滅ぼすことになりました。ではさあ、私を連れて行って、あの神託にあった巖の上に据えて

下さいませ。私はその仕合わせな御婚礼の式を済ませて、私の立派な良人に会いとうございますから。」

人々の行列は、峻しい山上の定められた巖に着くと、そのてっぺんに姫を置いて、一同は退散した。さてプシューケーは恐れおののき、巖の頂きに泣き伏しているところを、和やかに吹く西の優しい微風（ゼピュロス神）が、衣を膨らませて乙女を持ち上げ、高い巖の下道をゆっくりと運んで、麓の谷の花盛りの草原の真ん中へ、そっと下ろして横たわらせた。

巻の五：クピードとプシューケーの話（つづき）、不埒な姉たちの話、プシューケー禁じられた夫の寝姿を見ること。

p. 175-179：プシューケーは壮大な宮殿に入り、姿が見えない良人に迎えられた。

プシューケーは芝の臥床で身を横たえ、動顛した気持ちもせずまって、快い気持ちで寝んだ。十分に眠って、さっぱりした気分で見起き上がると、目の前に壮大な宮殿が見えた。その様子は神様の御業に違いなかった。一足その中に入って行けば、ユーピテル大神様が人間界に御降下されるために造営になられた天の宮居かとも思われた。大きな倉には、たくさんな宝物がぎっしりと詰まっていた。

プシューケーが嬉しさに夢中になって観てまわると、どこからか姿の見えない声が聞こえてきた。「奥様、なぜびっくりなさいますの。これはみんなあなた様のものがございますのに。ですから、寝間にいらして十分にお休みになって、お風呂にお入り下さい。私どもは、あなた様の侍女たちです。すっかりお元気になられたら、立派な御馳走をさし上げることになっております。」

御馳走の後で、誰かが入ってきて、歌を唄ったり、豎琴を弾いたり、合唱する声が聞こえてきたが、姿は見えなかった。夜が更けて、プシューケーが臥床に入ると、耳もとで優しい声が聞こえた。とうとうまだ見も知らぬ良人が現れて台に上がり、プシューケーを新妻として迎えいたわったが（二人は初夜の営みを行ったのでしょう）、夜も明けないうちに急いで出かけてしまった。とすぐに声たちが寝間に来て、花嫁の世話をし少女気の様々に乱れた心を慰めた。

p. 179-182：プシューケーは良人に、姉たちに会いたいと頼んだ。

こういうふうにして長いこと暮らしている間、プシューケーはだんだんと馴れて、声だけの者もいつしか寂しさの慰めとなった。さて一方、姫の御両親は、絶え間ない悲痛のあまり、にわかにはどく老けてしまった。それを聞いた二人の姉たちは両親の所に見舞いに行った。

ちょうどその晩、良人はプシューケーにこう言った。「私の可愛い妻よ。運命の女神は前よりいっそう意地悪く、お前に難儀させようとしている。今度、お前の姉さんたちが、お前をもう死んだと思って大騒ぎして、お前を探してまもなくあの巖のところへやってくるのだ。お前は決して返事をしてはいけない。」

少女は良人の意見どうりにすると約束したものの、夜と一緒に良人の姿が消えて行くと、「自分は楽しげな牢屋に閉じ込められて、人間と話すことも許されず、姉妹とさえ一目でも会うこともできない」と嘆くのであった。良人は少女をやさしく抱きながら、「ではもう好きなようにしなさい。災禍を求める自分の心に従うがいい。ただ、姉たちのよこしまな勧めにそそのかされて、決して私の貌を見ようとしてはならない。さもないと、そんな慎みのない好奇心から、これほど大きな幸福

の絶頂から奈落の底へと落っこちてしまうばかりか、私に逢うこともかなわなくなるのだから」と脅かしつつ戒めた。

プシューケーはいくぶん元気を取り戻して、良人に礼を言ってまた申し添えた。「あなた様とこうして楽しく暮らせなくなるくらいなら、私はその前に死んでしまいますわ。たとえ、あなたがどんな方でいらしても、お慕いしているのでございます。御家来の西風にいいつけて、姉たちをここに連れて来させて下さい。」そして、気もとろけるような接吻だの、甘えた言葉や抱擁だの、無理やりに良人をなだめるのであった。

p. 182-198 : 不埒な姉たちの奸計。

プシューケーは洩る良人を泣き落として、二人の姉を宮殿に招いた。姉達は、「自分たちは、年寄りの外国人の良人のところへ下婢同然にやられているのに」と、プシューケーの豪華な暮らしに嫉妬し、けしからぬ奸計を妹に企むのであった。

その頃、まだ顔も知らぬ良人は、プシューケーに向かってこのように戒めた。「あの義理知らずの雌狼どもは、しきりとお前をけしからぬ奸計にかけようと企んでいるのだ。つまり、私の貌を探り見るように、お前を説得する気なのだ。度々お前に言ってある通り、一度お前が見たらもうそれからは見られなくなるのだからね。これまでは子供みたいなお腹の中にも、今では私たちの子供がいるのだからね。そしてその子は、お前がこの秘密を守りおおせば、天界のものになろうし、もし破ったら人間にされるのだ。」(古代社会では、マリア様と同様に、人間の乙女が神様の子供を身籠ることは珍しくなかったようだ。)

二人の姉は「良人の顔も見ることがないとすれば、取りも直さずお婿さんというのは神様であって、あの女のお腹のなかにも神様を身籠っていることになるわ。そんなことは真っ平よ。」と話し会った。二人は言葉巧みにプシューケーに持ちかけた。「夜な夜なあなたの寝所へやってくるのは、大きな蟒(うわばみ)ですって。誰でも言ってますわ。あなたのお腹の子が十分に育ったら、一口に食ってしまうだろうって。命を助かるためには、鋭い剃刀と油を一杯入れた燭台を寝台に隠しておくのよ。その魔物が寝床にあがってから、寝入りばなに燭台を取り出して、毒蛇の首を切り落とすのよ。私たちも助けに来ますから、あなたぐるみ宝物を一緒に持ち帰って、人間のところへお嫁入りさせてあげるわ。」

p. 199-202 : プシューケーは禁じられた夫の寝姿を見てしまった。

夜がくるとひとしく良人も来て、ひとしきりウェヌスの前哨戦がとりかわされ(つまり、Hをしたこと)、良人は深い眠りに落ちた。するとプシューケーは、燭台を取り出して剃刀を手に握った大胆なさまは、女とは見えない変わりようであった。しかし差し付けた燭火が、寝間に立てこもる秘密を照らし出すが早いか、いきなり目に映ったものは何あろう、あらゆる獣類のうちでも一番に優しい、一番に可愛らしい野獣、とりもなおさず愛の神(クピード)の方が、様子の好い神様のいかにも様子の好く眠っておいで姿だった。

プシューケーは神々しいその顔立ちや体の美しさに飽かず眺め入っていた。彼女は好奇心に駆り立てられるまま、良人の武具に感じ入っていたが、ふと一本の矢を取り出し、親指の先で鏃の鋭さを吟味しようと思った。ところが手が震えて、かなり突き刺してしまい、紅い血の滴が可愛い露の珠を結んだ。こうして、彼女は自分とクピードとの愛へ身を落とし込んで行った。

ところが、プシューケーがあまりの嬉しさに悩み迷ううちに、灯明が忌まわしい妬みからか、それとも自分も同じように接吻を試みたいと思ったのか、燃えている芯の先から熱い油を神様の右の肩に落としたのであった。こういうわけで肌を焼かれ、約束がこのように破られたのを覚ると、神様は不仕合わせな妻にものも言わずに飛び去って行くのであった。

p. 202-204：良人は飛び去り、プシューケーは一人取り残された。

それでも、プシューケーは発って行く良人の右足に両手で取り縋り、今を極みと随いて行ったが、とうとう疲れ果てて地面に落ちてしまった。神様は糸杉の上に降りてきて、地上に臥している少女にこう言った。「私はお母様の命令で、お前をみじめこの上もなく下らない人間の恋に縛りつけて、とても卑しい結婚をさせてあるはずだったのを、その代わりに自分で好きになって、お前のところへ飛んでってしまったのだ。思えば、我と我が身を自分の矢で傷つけてしまって、お前を自分の妻にしたのだ。そのあげくが、お前には野獣とみなされ、刃でこの頭を斬り落とされるところだった。こんなことは、お前に繰り返し戒めておいたじゃないか。お前の結構な相談相手の女たちには、教えた罰を与えてやろう。だけど、お前の罰は、私が飛び去ってしまうだけにしといてやるよ。」

プシューケーは、良人の飛び去る姿を、激しく泣き悲しみながら追い眺めていた。良人の姿が遥かの空に消えてしまうと、すぐ近くの流れに身を投げてしまった。けれども優しい川は、巻き添えを恐れて、少女を草花の咲き乱れた河岸に置くのであった。



図2. プシューケーの寝床を去るアモール（クピードー）。

作者はフランソワエドワード・ピコ（1786-1868）。製作は1817年。所蔵はルーブル博物館。

p. 204-207 : 姉たちは神罰を受けた。

はからずも河岸で、野山の神様パーンが女神エコーに様々な音色を歌い返すことを教えていた。山羊の足をした神様は、心を傷め気もたえだえのプシューケーを、優しい心でこう慰めた。「自分から死ぬようなまねは、またとなさぬがよい。それよりも、クピード様のお気に入るよう誠を尽くして、お祈りして願いなさい。」

こうして諭してくれた牧の神様に、プシューケーは手を合わせて歩み去った。長い道程の末、彼女はある町に着いた。そこは、片方の姉の良人が治めている国であった。彼女は姉に会って、こう言った。「あなたがたが勧めて下さったように、眠っている良人の貌を見ると、女神ウェヌスのお子様の崇高いクピード様だったの。私は動揺してしまい、灯明が燃えている油を良人の肩に落としたの。その痛さに良人は目を覚まし、お前はこのような恐ろしい罪を企んだのだから、ここから出て行きなさい。私はお前の姉さんと正式に結婚するんだから。」

これを聞いたその姉は、狂おしい欲望と歪んだ嫉みに駆り立てられて、いきなり例の巖に駆けつけた。ほかの風が吹いているのも構わず、盲滅法な望みに夢中になってまっしぐらに飛び下りた。しかし、落ちて行くうちに、手足もばらばらになって、あとでは心相応に鳥や獣に臓器をついばまれた。もう一人の姉も、同じような死様を遂げた。(古代人は残酷なので、悪い人々が悲惨な死を遂げても、因果応報であると平然としているようだ。)

p. 207-213 : クピードがプシューケーを自分のものにしたことに、ウェヌスはすっかり腹を立てた。

プシューケーはクピードを探して国々を歴訪した。一方、クピードは燭火の傷の痛さにお母様の奥の間に臥せて呻吟していた。海猫が大洋のふところ深く潜って行って、ウェヌス様にいつつけた。「息子さんは火傷が大変に痛んで困っている。生命のほども疑わしく臥んでいる。ウェヌスの家の人たちはどこの国でも不評判だ。息子のほうは山中で浮気をしているし、あなた様は海に潜ってばかりいて世間に出てこられない。おかげで、今では雅びも優しさもこの世から姿を消し、みんなが粗野で野蛮になってしまった。」(ギリシャ・ローマの神話では、神様も病氣や怪我に苦しみ、死にそうになるようだ。)

ウェヌス様はすっかり腹を立て、海猫に聞いた。「じゃあ、私の立派な息子にはいい女があるのだね。その女の名は何ていうの。まだ生のまま元服もしていない子供をそそのかすなんて。」海猫は「私の聞き憶えが本当なら、プシューケーとかいう名の少女に、死ぬほど焦がれておいでの模様です」と答えた。それでまあ、ウェヌスはたいへん憤って叫んだ。「プシューケーをだって！私と容色争いをして、名号を競い合っている女を、もし本気であの子が好きになったというなら、きっとあの小僧は私をやり手婆とでも思ったのだろう。」

ウェヌスはこう大声で言い立てながら、急いで海を出て自分の金色のお居間に行って、息子が臥ている扉口から叫んだ。「結構なことだね。お前の親の命令に背いて、私の敵を汚れた愛で責め苦しめるどころか、まだこんな年頃の子供のくせに、いつもの気儘勝手なませたやり方であの女を自分のものにしまおうなんて。おかげさまで、私は自分の敵を嫁にして我慢するのかえ。お前よりずっと立派な子をいくらでも産んであげるから。それより、うちの下僕を一人後継ぎにして、お前の持っている翹なり弓矢までもやっ飛ばさうか。だけど今、笑い者にされたこの粗末をどうつけてくれようか。いっそ私といつも仲悪の『真摯』の手助けでも借りてやろうか。」

こうウェヌスはヒステリーに猛り立ちながら家を出ていった。すると、ケレース（ギリシャの大地豊穡の女神）とユーノー（ユーピテルの妃、ギリシャではヘーラー）の二方の女神がやって来て、「なぜそんなに怖い顔みでもって、せっかくの瞳の美しさを押し込めてるの」と訊ねた。ウェヌスは「煮えくり返っている私の胸を無理に押さえつけようというのでしょうか。それより、あの逃げ出してうまく飛び回っている女を探し出して下さいまし。あなた方だって、私のところの結構な評判も、息子の所業も、よくご存知でしょう。」と言った。

二人の女神たちは、ウェヌスの腹立ちをなだめようとして、こう言った。「あなたとしたことが、坊ちゃんのお楽しみを攻撃されたり、その好きな女を始末してしまおうなんて。坊ちゃんが綺麗な娘さんにうっかり笑いかけたからって、大それたことかしら。あなたがご自身の家では色恋沙汰を嚴重にせきとめておいて、あなたがやたら世間じゅうへ情けの種子をまいて歩くのを、神様だって人間だって誰一人として放っておくものですか。」女神たちは、矢の勢いを畏れてクピードーの弁護をした。ウェヌスのほうは、ひどい目にあつたことをこう弄みものにされたのに腹を立てて、海原のほうに行ってしまった。

巻の六：「愛とところ」の物語（つづき）、プシューケー愛神をたずねて苦勞のこと、（今回は、ここまで）驢馬のルキウス少女を乗せ脱走のこと。

p. 215-219：プシューケーはクピードーを探し回ったが、誰も援けてくれない。

話変わってプシューケーは、夜も昼の良人を探し尋ねて心の憩むひまもなかった。（彼女は身重の身で、自分の衣食住をどのように調達していたのでしょうか？）ただひたすらその憤りを、せめて下婢の祈願でもって和らげたいと祈った。高い山の頂にお宮があるのを認めると、高い尾根を超え登り、神座の傍に辿りついた。そこには穀物の刈穂や刈り入れ道具が放り出されていたので、丁寧に片付けた。

情け深いケレースがおいでになり、少女に声をかけた。「お前は可哀そうなプシューケーじゃないの。ウェヌス様がかんかんになって、世界じゅうをお前の行方を探しているよ。」（遙か昔には、神様がしばしば人間に顕現していたのだろうか？多分、神殿の巫女がトランス状態になり、神意を人に伝えていたのであろう。）プシューケーは女神の足もとに身を投げ出してお願いした。「あなた様にお縋りいたします。どうかあの尊い女神様の烈しいお怒りが和らぐまで、ほんの二、三日でも身を隠させて下しませ。」

ケレースは答えた。「援けてあげたいが、姉妹の機嫌を悪くするのはねえ。直ぐにここから出て行って下さい。私がお前を囚人にしなかったのを、いいことと考えるおくれ。」プシューケーは、ユーノーの神殿でも、援けを求めた。しかし、ユーノーにも「あの女は私の嫁にあたる。法律でも、他家の下婢が逃げたのを主人の同意なしに受け入れてはならないことになっている」と、断られた。

p. 220-224：プシューケーはウェヌスの門口に出頭した。

プシューケーは仕合わせの舟が難破してしまい、ひとり思案に沈んだ。「自分からさきに御主人へ身をまかせ、烈しいお怒りの勢いを和らげたらどうだろう。長い間探している方にも、お母様のお邸で会えるかもしれない。」

ウェヌスは地上を探し回っても仕方ないとあきらめて、ユーピテルの大宮殿にお出かけになり、「メルクリウス（伝令通商の神で、ギリシャのヘルメースと同一視される）を貸していただきたい」とお願いになった。ユーピテルの許可を得て、ウェヌスはメルクリウスに言い立てた。「あなたが世界中へ呼びかけて、見つけた人には御褒美を出すってお布令を廻して下さい。」

メルクリウスは、指図を受けた役をこのようなビラを配布して果たした。「ウェヌス神の侍婢でプシューケーという名のお尋ね者を、逃亡から引き戻すかまたは隠れ家を指し示し得る者は、ルムキアの円柱（ローマの大競技場の南にある神殿で、ウェヌスの権化とも考えられた）の後ろの、このビラの布令人メルクリウスの許に出頭すべし。通告の褒美として、ウェヌス様の七つの接吻と一つの心もとろける舌押しでなし下さる。」

プシューケーは、これ以上躊躇する気持ちを無くして、御主人の門口に出頭した。ウェヌスの召使の一人で「慣例」という女が出てきて、こう言った。「お前さんを尋ねだすんで私たちがどんなに苦勞をしてきたか。これから、今までの増長慢の懲らしめをうんとみせてやるから。」ウェヌスは侍女の「心配」と「悲しみ」を呼び寄せ、プシューケーを鞭で打たせたり、その他いろいろな責め道具で苛めさせた。

（身重の乙女をこのように折檻するのは、パワハラでありセクハラである。）

p. 224-232 : ウェヌスはプシューケーに無理難題を押し付けたが、プシューケーは不思議な助けを受けて難題を乗り越えた。

ウェヌスはプシューケーに言った。「ご覧よ、こんな大きなお腹をして。私の慈悲心をおこさせようっていうのだろう。まだこんなに若い女ざかりにお祖母さんなんて呼ばれてさ。しかも下司な端女の産んだ子を、このウェヌス様の孫だって世間に謳わせるなんて。第一この結婚はまるで身分違いだし、そのうえ田舎家で証人もなくやったのだから正式なものとは認められやしないさ。生まれた子供は私生児ということになるのだよ。」（古代社会では、「私生児」は卑しい人間として蔑まれた。イエス様も「お前は私生児だ！」と蔑まれたので、「違うわい！俺は神の子だい」と言われたのかも知れない。）

ウェヌスはプシューケーに飛びかかって、着物を引き裂き、さんざん打擲したあげく、小麦や大麦や粟などの色々な雑穀を取り寄せ、それらを混ぜ合わせておいて、こういつけた。「お前みたいな不恰好な召使は、ただ精出してお仕えでもして、好きな人の気にいるようにするしかないだろう。これから、お前さんの働きを試してあげるから。夕方までに、いろんな種子の寄せ集めを一粒ずつちゃんと選り分けておいてね。」

プシューケーは、いつけられた仕事の大きさにただ茫然としていた。そこに小さな蟻が現れて、蟻たちの大軍勢を呼び集めて、山と積んだ穀物を一粒ずつ選り分けてしまった。夜が来ると、お酒を十分にきこしめしたウェヌスが帰ってきて、「これはお前の仕事ではない。本当に悪い女だ」と言って、寝間に入ってしまった。この間じゅう、クピードは御殿の奥に閉じ込められており、この好いた同士は同じ屋根の下で別々にみじめな夜を明かした。

明け方になると、ウェヌスはプシューケーにこういつけた。「あそこに見える森の流れの奥に泉があるので、そこにいる金色の皮衣にかがやいている羊の毛を、大急ぎで一房とってきて欲しいのだがねえ。」プシューケーは命令を果たすよりも、河沿いの巖の上から見を投げようと思った。

ところが、河の中から音楽の育ての親である緑の葦が、こういつて歌い諭してくれた。「プシューケーさん、あなたはいろんな苦勞に心を痛めても、聖らかな水をけがしてはいけません。それから、こんな時間にあの恐ろしい羊どもに近寄っては駄目ですよ。今は照りさかる太陽から炎熱を受けて、ひどく荒れ狂っています。真昼時の日がようやく熱気を収めて、羊たちが鎮まった頃、鈴懸の木にかくれて、木立の枝葉をゆすれば、金色の羊の毛が見つかるでしょう。」プシューケーは葦の葉のいったようにして、柔らかな金色の房をふところいっぱいにつまみとることが出来た。

ウェヌスは、二番目の危ない仕事も気に入らず、こういうのであった。「今度だつて、誰が陰でたきつけたのか、私にはよく分かっているよ。今度こそ、本式に厳重な試験をしてあげるから。あすこのとても高い巖の上に聳え立って峻しい山の頂が見えるだろう。そのてっぺんの水が湧き出る奥底から、冷たい水をこの小甕へ汲んで来ておくれ。」

少女が峰の麓に来ると、大きな岩が聳えていて、その割れ目から噴流がほとぼしり出て、そのまま滝となって崖を流れ落ちていた。狭い水路には、恐ろしい竜が見張りをしていた。そのうえ、水までもが「あっちへ行け」、「何をする、気をつけろ」、「逃げろ」、「そら死ぬぞ」などと叫んでいた。しかし、有難い神様の御摂理により、ユーピテル大神様のあの気高い鳥が飛んできて、水を汲んできてくれた。

p. 232-237 : 業を煮やしたウェヌスはプシューケーに冥界に行って、女王プロセルピナに美を分けて貰って来るように命じた。

こんなにしてさえも、猛り立つ女神の御心を和らげることはできなかった。恐ろしい薄笑いを浮かべ、女神はプシューケーにこういった。「お前さんは大した魔法使いだとみえるね。最後に、冥王がおいでの方の棲家へ行つとくれ。お妃のプロセルピナにこの函を渡してこういうのだよ。あなた様の好い御容色を少し分けて下さい。前からの御自分の分は、御子息の看病ですっかり使い果たしてしまいましたので。」

プシューケーは冥界に行くために、ある高い塔から身を投げようとした。ところが、その塔が急に物を言い出した。「身を投げて死んでしまえば、そこから帰って来れませんよ。ラケダイモン（スパルタのこと）の方田舎のタイナロスに行きなさい。そこには閻王の息抜き穴というのがあって、そこから冥王の御殿に行けますから。でも、空手で行っては駄目です。密酒でこね固めた大麦粉のお餅を両手に持って、銅貨を二枚くわえて行くのです。銅貨は三途の川の渡し守りのカローンに支払うお金で、餅は冥王の御殿を守っている猛犬（ケルベロス）を手なずける餌です。」

智慧の広い塔は、冥界の怖い道に行く方法を、プシューケーにこまごまと教えてくれた。（塔が話した冥界の様子は、日本の仏教が語る死後の世界とよく似ている。このような死後の話は、古代では世界中に広まっていたようだ。）塔は最後に「とりわけ気をつけなければならないのは、小函の中を物好きに覗いて見てはいけません。」と言った。プシューケーは、塔の教え通りにしてプロセルピナに会うことができ、ウェヌスの用むきを伝えた。すると、すぐさま小函に何かを容れて固く蓋をして渡してくれた。

p. 237-242 : クピードーは、プシューケーとの結婚を大神ユーピテルに願い出た。

このようにして冥界から立ち戻ったプシューケーは、好奇心が湧き上がって、開けないように警告されていた小函を開けてしまった。ところが、その中には何も入っていない、冥界の正真正銘の地獄の眠りだけが見る見る立ち昇ってプシューケーを取り巻いた。プシューケーはその場にくずれおれて、眼をつむった死屍と相違なくなってしまう。（この話は、浦島太郎の話とよく似ている。）

一方、クピードーは傷跡も癒ってきたので、長いことプシューケーと別れているのが我慢できなくなった。そこで、閉じ込められていた寝部屋の窓から抜け出して、プシューケーのところへ飛んで行った。そして、睡眠を拭き取って元の小函に戻し、彼女を呼び醒ましてこう言った。「そらまた、お前は今度も同じ物好きから死ぬところだったじゃないか。ともかく、お母様のいいつけた仕事を早く果たしておしまい。後のことは、私が始末をつけるから。」

クピードーは、大神ユーピテルの御前に飛んで行き、事の次第を述べてお助けを願いでた。ユーピテルはメルクリウスにいいつけて神様方を会議にお寄せ集めにな

り、こう御詔なさった。「わが神々たちよ、皆々がよくご存知のように、ここにいる若者は私の手で大きくなった者である。この男の若い盛りの血気にはやる行動を、何かで制御する必要があると、私は思う。それ故、結婚の足枷で青年の気儘気随を繋ぎ留めるのが一番よいことだろう。」

ユーピテルはウェヌスにこう言った。「娘よ、そなたの立派な血統が人間との婚約で家格を下げはしないかと、気遣われぬがよい。私が今この縁結びを不釣り合いではなく、正式で国法にも適ったものにしてあげるから。」すぐさま、大神はメルクリウスにいいつけてプシューケーを天上へ連れて来させたうえ、アンプロシア（**神様の飲物**）を杯に満たしてこう言った。「プシューケー、さあ飲んで常盤の命を得よ。さすれば、いつまでもそなたの手からクピードが傍へ外れることもなく、未来永劫この縁の絶えることもあるまいから。」

と見るうちに、御婚礼の御馳走が所も狭しと並べられた。一番の上席には、花婿がプシューケーを傍らにひきつけて座を占め、同様にユーピテルもお妃のユーノー共々腰をかけ、また順ぐりにすべての神様方も席におつきになった。（**ここで、神々の饗宴が始まった。その詳細は、p. 241 に記載されている。**）

こういうふうにして、プシューケーは正式にクピードのところへお嫁入りをし、やがて二人の間には月満ちて一人の娘が生まれた。これが、ウォルプタース（喜悅）と人が呼ぶ女神である。（**二人は、所謂「出来ちゃった婚」で結婚したことになる。**）

記載：2014年8月20日

資料：「グピードーとプシューケーの物語」を題材とする絵画や彫刻は多いが、その中で特に有名な作品を図3と図4に紹介する。本物は、ルーブル博物館にあるので、パリに行かれた際には、ぜひご覧になって下さい。



図3. 「グピードーの接吻で蘇るプシューケー」の大理石像：製作はアントニオ・カノーヴァ(1757-1822)。



図4. 「クピドーの接吻で目覚めるプシューケー」：若い王女プシューケーが、彼女には姿が見えないクピドーから初めての接吻を受けて、驚き、動揺しているところである。ここに描かれている古代神話は、愛の物語であるだけでなく、形而上学的な寓意でもある。すなわちプシューケーは、人間の魂を典型的に表わしている存在なのである。1798年にジェラール（1770-1837）によって描かれたこの作品は、官能性の表現やある種の形態の抽象化へと向かいつつあった、新古典主義のその後の展開を物語っている。